

「選挙運動方法の合意」

北村喜宣（上智大学法科大学院）

選挙の際には、各陣営とも、有権者の票を一票でも多く獲得するために、様々な戦略・戦術を駆使する。「勝てば官軍」の世界であるから、相当にヒートアップした活動が展開される。

しかし、もとよりノー・ルールではない。公職選挙法およびその下位法令による詳細な法的規律がある。これらは、政治家集団である国会が、政治家としてなしうる行為を具体的に決定したものである。公職選挙法は、内閣提出法案ではなく、議員提案（実際には、総務委員会委員長提出）より制定・改正される。形式的にみるならば、まさに最初から最後まで自分たちで話し合った成果であり、合意形成がされた結果である。

それが、候補者がかけるタスキであり、選挙カーによる候補者名の連呼であり、大きな顔写真がはいったポスターであり、それがズラリとはられる掲示板であり、新聞に折り込まれる選挙公報である。何が許されて何が許されないかについては、刑法犯は別にすると、基本的には、政治家の「決めの問題」である。

そうであるから、何がルールかは、国によって多様である。おそらくは、本格的な比較研究があるだろうが、ここでは、わずか 5 泊しただけの米国バーモント州での見聞を踏まえて述べてみたい。滞在したのは、10 月下旬であり、いわゆるスーパー・チューズデイ（11 月 8 日）の直前であった。関係法令をまったく参照していないため、「現認したことは許されている」という前提で整理する。

ひとつは、ポスターである(写真)。特徴的なのは、日本のように候補者の顔写真をのせたものはまったくみられない。あるのは、大きさが A4 判 6 枚分ほどの大きさの横長のポスターであり、そこにはきまって、「○○for Senate」「○○for Governor」という文字だけがレイアウトがされている。「市政に新風を！」というようなメッセージはない。それが、両短辺に簡単な支柱を施された形で、支持者の自宅のフロントヤードにさされている。同じものは、道路の

中央分離帯となっているグリーンのなかにさされている。数は多くない。

ポスターとしては、これっきりであった。実に、「目にうるさくない」。





写真：バーモント大学構内でみかけた選挙ポスター（筆者撮影）

一種類しかないし、だからといってべたべたはられたりおかれたりするわけではない。これは、きわめて抑制的と感じた面である。たしかに、日本の状況なら、確実に public nuisance になるだろう。

もうひとつは、それとは真逆を感じたテレビによる政見放送である。テレビをみても、通常の CF にならんで頻繁に放送されている。これも特徴的であった。たまたまみたのは、お隣のニュー・ハンプシャー州の連邦上院議員選挙（現職が共和党で対抗馬が民主党の現職知事。いずれも女性）についてのものであった。最初は「いったいこれは何だろう」と感じた。

ちょっとぼやけた画面に女性の顔がアップにされる。全体的にグレーの色調である。ナレーションが流れる。「〇〇さんは、xxの問題について、▼▼のような主張をしています。そのために、低所得者の生活は一層悪化しています。これから6年間、同じような政策が継続されるのに耐えられますか。あなたの子供は苦しみながら成長するのですよ。」ここで、画面がパッと明るくなり、この選挙広告のスポンサーである対立候補の顔が大写しになる。ちょうど、音楽がマイナーからメジャーに転調するようなものである。女性は語り始める。「私はそうではありません。私は、〇〇さんとは違って、xxの問題については△△をするつもりです。この政策をとれば、わが州の状況は相当に改善されます。▼▼がいいか、△△がいいか。決めるのはあなたです。」もちろん、批判されている対立候補者も、同じような構成の選挙広告を放送する。公金を不適正に使用したといった内容をめぐっても、相互に応酬がされている。

相当に強烈なネガティブ・キャンペーンであり、名誉棄損のようにも感じる。しかし、大統領候補者討論会（Presidential Debate）という名のもとで、公衆の面前での「罵倒合戦」が許されるのであるから、これくらいは問題ないのであろう。もっとも、雑談をした米国人にも、「ああいった放送にはうんざりとする」という人が多かった。しかし、合法なのである。

日本でも、選挙カーの連呼について、多くの市民は、「あれにはうんざりする」と感じている。しかし、これも合法である。

選挙運動のルールは、政治家が自分たちの運動パフォーマンスを最大化できると感じる内容になっているはずである。市民との合意形成はされていないようにもみえるが、

活動は一過性であるから、「我慢する」という程度の社会的合意はあるのかもしれない。

ところで、時期が時期だけに、大統領選挙の運動が活発な状況を期待していったのであるが、少なくともバーモント州においては、全くなかった。街をみているかぎりでは、現在、大統領選挙の最終局面であることが信じられないほどであった。トランプの「ト」の字もクリントンの「ク」の字も見られない。バーモント州は、そもそも民主党が強く、かつ、民主党の大統領候補者候補であったバーニー・サンダースの地元であるため、彼の選挙戦撤退によって、大統領選挙は「すでに終わっていた」のである。シラけた雰囲気だけが漂っていた。